中部電力公募型　エネルギー・環境教育プログラム開発

実践報告
中学校家庭科
「東日本大震災を経験された方々から学ぶ
～私たちのこれからの暮らし～」

三重大学教育学部附属中学校
教諭　吉岡　良江

Ⅰ　はじめに

本校では、平成 24 年度にユネスコスクールの指定を受けたことを契機に、現在 ESD 教育[*1] の充実に向けて、その位置づけ及び目標の明確化に努めるとともに、基本的な理念に則った実践を対応可能な教科から順次進めている。

技術・家庭科＜家庭分野＞では、「個人及び家族の発達と生活の営みを総合的に捉えて、日々の生活活動の中で、生活の主体者として自立するとともに、家族をはじめとする他者とともに生活課題の改善や解決に取り組む実践力をもち、明日の生活環境・文化をつくることのできる資質・能力を育むこと。」を本質と捉え、生徒が、［①個人・家族の発達と福祉に関する課題、②生活を自律的に営む力をつけるための課題、③生活環境・文化をつくる実践力をつけるための課題］に向き合い、仲間とともに学びあう過程で、関連する様々な能力が領域を超えて引き出され、最終的にはそれらを総合した力が、生徒の意思決定力や実践力につながると捉えている。

一方、ESD 教育においては、「地球規模での環境破壊や、エネルギーや水などの資源保全が問題化されている状況を踏まえ、次世代をも含む全ての人々にとって、より質の高い生活をもたらすことができる状態での開発」が最重要課題であり、「そのためのてだてとして個々のレベルで地球上の資源の有限性を認識するとともに、自らの考えを持って、新

---

*1 持続可能な開発のための教育（ESD:Education for Sustainable Development）は、私たちとその子孫たちが、この地球で生きていくことを困難にするような問題をについて考え、解決するための学びである。2002 年の国連総会において、我が国の提案により、2005 年から 2014 年までの 10 年間を「国連持続可能な発展のための教育（ESD）の 10 年」とすることが決議され、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）がその推進機関に指名された。
これを受けてわが国では、日本ユネスコ国内委員会や関係省庁が協力し、ESD の推進のため取り組んでいる。2006 年には内閣官房に設置された ESD 関係省庁連絡会議が、わが国における ESD の実施計画を策定し、同計画に基づいて様々な関係者と連携し、ESD を推進している。

しい社会秩序を作り上げていく、地球的な視野を持つ市民の育成」が理念として掲げられている。

家庭科の本質と ESD 教育の理念に相通ずる部分に注目することで、「教科の本質に迫る学びの構築をめざすことにより、ESD 教育としての家庭科教育の可能性を明らかにできるのではないか。」そのような想いを抱くに至った。このような想いを抱きながら試みた、一連の実践の報告を以下に記す。

〈本実践における ESD 教育の構成概念〉

家庭科における ESD 教育の構成概念（妹尾他,2013）に基づき、次の３概念を踏まえた実践としたい。

・環境【環境における物資やエネルギーの循環性、相互関連性及び有限性を認識すること】
・地域【人・地域・社会とのつながりやかかわりなどの連携性・協同性を認識すること】
・ライフスタイルの変革【持続可能な社会の実現のために、一人ひとりが生活者として、ライフスタイルを見直し、社会参画しようとすること】

Ⅱ　概要

１　テーマの設定について

日々の暮らしそのものが学びの対象となる本教科においては、「如何に生きるか」がテーマとなる。筆者はこのテーマに対する解を、

○「自分らしく、主体的に生きること」
○「自分にとって、また仲間をはじめとする他者にとっての『生涯に渡る人間らしい生活』　を実現すること」

と年次を経る毎の見直しを図りながら、定義づけてきた。本年度においては、生徒のつぶやき並びに授業の振り返りの過程で、「生涯に渡る人間らしい生活」の実現は、今を生きる“私たち”を対象とするだけではなく、22 世紀を生きる次世代の人々にとってのものでもなければならないということに気づくことができたことにより、

○「全ての人々にとっての『生涯に渡る人間らしい生活』を実現させることのできる資質　・能力の育成」に見出したいと考えるに至った。

＊なお、本稿では「生涯に渡る人間らしい生活」とは、筆者のこれまでの取組を踏まえ、
・健康で安全安心な衣食住の生活が保障されていること
・その人の能力がよりよく発揮されること
・常によりよい暮らしの実現をめざし、状況を判断して自らの責任で最も効果的な行動がとれることと定義する。

「このテーマを実現させるためには何が必要か。」筆者は本校に赴任以来、教科の本質に迫る探究の学びにこだわることが重要になると捉えている。そこで、先に示した家庭科の本質は、「いのちの主体である個人・家族の幸福の追究をめざすものであり、日々のいのちをつくりだし、育み、よりよく生きるための合理的な意思決定ができる能力の育

成を主たるねらいとする教科である。」と捉え直すことができると判断し、生徒にとって身近なところに実在する「いのち（生と死）に関する生活課題」を学習課題として授業を展開することに努めた。

一連の取組からは、本学習課題は必ずしも唯一の解を求めることを目的とするものではなく、多様な考えを共有するところに価値を見出せるものであることから、仲間をはじめとする他者と本音で語りあい、互いの声を聴きあい、想いを深めあうことの大切さを確認することができた。

本実践においても、ここに挙げた教科の本質に迫る学習課題を設定すること、そして他者と想いを深めあうことにこだわっていきたい。

２　東日本大震災を学習課題として設定することについて

教科の本質に迫る学びを実現させるためには、日常の生活の中に存在する生活課題を学習課題に設定することが重要であると考える。これはその課題を生徒が他人事ではなく、自分にとっての課題であるということを自覚するためにも、また、現状を受け入れる（環境適応の）力の育成、並びによりよい暮らしを自分たちの力で創る（環境醸成の）力の育成のためにも重要である。

本実践においては、生徒にとって身近なところに実在する「いのち（生と死）」に関わる学習課題として、東日本大震災に注目した。平成 23 年３月 11 日に起きた東日本大震災は、改めて語るまでもなく、その地震規模の巨大さから予想をはるかに超えるレベルの津波が発生したことによる町の破壊のすさまじさに至るまで、今までの経験からははかりしれない規模の地震である。まだまだ復興には時間を要する状況にあるが、私たちはこの震災を通して、多くの人々の尊いいのちと引き替えに、改めて人と人とのつながりの大切さや、将来をも見据えた上で自分の暮らしを見つめ直すことの大切さに気づき始めたのではないだろうか。失われた過去を取り戻すことはできなくとも、今後起こり得ると言われている南海トラフ地震等に向けて、リスクマネジメント（被害回避・被害低減）の視点で今の暮らしを見直すことが重要な課題となることも明らかとなってきている。

震災後２年半経過した今、あらためて震災を経験された方々の想いを聴かせていただくこと、そして被災地の今を知ることは、今を生きる私たちにとっての義務であり、「生涯に渡る人間らしい生活」の実現のため、また 22 世紀を生きる次の世代の人々にとっての「生涯に渡る人間らしい生活」を実現させるために、私たちができることを考える上で、貴重な学びとなると確信する。

３　実践

（１）　生徒の実態と単元

〈単元について〉

本単元は、「Ｃ　衣生活・住生活と自立」の（２）「住居の機能と住まい方」のア・イ、及び「Ｄ　身近な消費生活と環境」の（２）「家庭生活と環境」のアとの関連を図っている。ここでは、住居の基本的な機能について学ぶとともに、自然災害への備え等の視点か

ら、家族の安全を考えた室内環境の整え方や快適な住まい方を工夫できること、住生活領域の学びと関連づけながら、環境に配慮した消費生活について工夫し、実践できる力を育成することをねらいとしている。

これを受け、本単元では、東日本大震災を経験された方々の暮らし、その中でも特に仮設住宅での暮らしに注目し、仮設住宅のすまいとしての役割・機能について考えたり、近い将来起こり得るであろうと言われている南海トラフ地震等を想定し、実際に仮設住宅で暮らす際に必要な事柄について学ぶものとする。その上で、リスクマネジメントの視点をもって、私たちにとってまた 22 世紀を生きる次の世代の人々にとって、よりよい住環境を整えることのできる資質・能力の育成をめざしたいと考える。

〈生徒について〉

○「東日本大震災を経験された方々から学ぶ」に関わって

第３学年の２学期ということで、中学校家庭科の学習に関する集大成の時期を迎えたと言える。３年間で完結したいと考えてきた各領域の学習も、そのほぼ全てが学習済みの状況にある。特に本単元と大きく繋がる住生活領域に関しては、第２学年の２学期に学習済みである。そこでは、住まいの役割等住まいに関する基礎・基本的事項の学習と併せて、震災時を想定した上での住まいの在り方等についても学んでいる。その際の授業に向き合う姿からは、何事にも熱心に取り組む様子は多々認められるものの、東日本大震災の後の授業であったにも関わらず、それはあくまでも他人事であるというような受けとめ方をしていると思われる様子がグループワークでの会話等から多々認められた。

○ ESD 教育の視点に立った学習と関わって

本年度も１学期に実施した第１回幼稚園訪問での経験を基にして、「幼稚園で出会ったあの子に伝えたいメッセージ」をテーマに据えた幼児向け絵本作りに取り組んだ。昨年度との比較という形で振り返ると、「いのち（生と死）」をテーマに据えた絵本を作りたいと考える生徒は見られなかったということ、食をテーマに据えた絵本を作りたいと考える生徒が多く見られた点が本年度の特徴である。

これについては、第１回目の幼児との触れ合いが昼食指導を主としたものであったことや、２学期に予定している第２回目の幼児との触れ合いが双方が育てた野菜を持ち寄っての味噌汁作りということで、その準備について検討し始めていた時期であったこと等の影響も考えられる。

「食料難に苦しむ難民キャンプで生活する子どもに注目し、今自分たちにできることを幼児に考えさせたい」この類のテーマはこれまでの絵本作りには見られなかったものであったということ、また、間接的にではあるが、「いのち（生と死）」に向き合うテーマであると判断し、このテーマで絵本を作ることの是非を問う授業を展開した。

その結果、難民のことについて触れた内容の絵本は幼児には難しすぎるという意見や難しい内容であっても伝えていくべきテーマであるという意見等様々な考えが寄せられた。唯一の正解を求める課題ではないが、育てる立場に立って、「次の世代を生きる人々の幸せをも考えた上で今自分たちはどうあるべきか」を考える初の貴重な学びの場となった。

（２）　本単元におけるねらい

・仮設住宅の住まいとしての役割について考えることができる。【関心・意欲・態度】《環境》《地域》

・今後の災害時を想定して、被害を未然に防ぐために、また被害を最小限に食い止めるために、必要なこと・自分たちにできることをレポート形式にまとめ、提案することができる。【創意・工夫、技能、知識・理解】　《ライフスタイルの変革》

・災害時を想定して、仮設住宅で生活する際の基礎的な知識をリスクマネジメントの視点で身につける。【知識・理解】　《環境》《地域》

・実際に仮設住宅での生活を経験された方々の声を基にして、いかなる場であっても、安全・安心な暮らしの実現のために、地域の人々の連携・コミュニティが重要であることを理解する。【知識・理解】　《地域》

（３）指導計画　　（全４時間）

第１時　　仮設住宅って何？　　・・・・・・・・・・・・・・１時間
第２時　　仮設住宅と住まいの役割・・・・・・・・・・・・・・１時間
第３時　　仮設住宅に住む・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間
第４時　　災害時を想定して　できることを考えよう・・・・・１時間

（４）　授業の実際

《第１時》　仮設住宅って何？

①　ねらい

・住まいについて知っていること・知らないことを共有するとともに、仮設住宅に関する基礎的なデータを基にして、被災地における仮設住宅での暮らしについて知る。

②　授業の概要

震災以降頻繁に耳にするようになった「仮設住宅」という言葉に対して、その定義を確認するとともに、仮設住宅について知っていること・知らないことを共有した。

知っていることについては、［１階建てである］［白い］［無料である］［孤独死や騒音等様々な問題を抱えている］［生活に必要最低のものしかない］［楽しみがない］［ストレスがたまる人もいる］等、住宅そのものについての意見に加え、そこでの暮らしに対するマイナスのイメージを「知っていること」として挙げる向きが強いことが認められた。また「１階建ての白い建物」といった限られたスタイルの建物を仮設住宅と理解している（みなし仮設住宅等についての理解には至っていない）ことが明らかとなった。一方、知らないことについては、［大きさや材質、耐震性等について］、［光熱費や家賃について］［使用後の扱い（家電等も含む）］、［仮設住宅を出た後の住まいについて］等、多岐に渡ることが明らかとなった。

ここで挙げられた「仮設住宅について知らないこと」について、また「知っていると思っていたこと」の信憑性については、仮設住宅に関する基礎的な情報を資料として提示することで確認できた。但し、これはあくまでも一般論として情報であり、生徒から挙がった「知らないこと・知りたいこと」の全てが解決できたわけではなかった。

《第２時》　仮設住宅と住まいの役割

①　ねらい

・住まいについて学んだ知識を基にして､仮設住宅の住まいとしての役割について考える。
・仮設住宅に関するデータを読み取ることで、被災地における仮設住宅での暮らしについて理解する。

②　授業の概要

前時に得た仮設住宅に関する基礎的な知識及び、第２学年で学んだ住生活についての知識を基にして、仮設住宅が住まいとしての役割を担っているか否かについて交流した。「生命と生活を守る場」「休養と安らぎを与える場」「子どもと家族が成長し合う場」という住まいの基礎的な役割について留め直した上で、仮設住宅をどう捉えるかというところに注目した。どの立場に立つかによって捉え方は異なるということ、基礎的な資料はあるものの、やはりイメージに依る部分が大きいことから、実際にそこで暮らす人々の生の声を聴く必要があるということが明らかとなった。

《第３時》　仮設住宅に住む

①ねらい

・三重県における被災時を想定した取組について知るとともに、実際に仮設住宅で暮らすことになった際のことを想定して、そこから見えてくる課題について考える。

②　授業の概要

本実践に先立ち、筆者は、三重県下における自然災害に備え、地域の防災・減災活動を率先して担う人材の養成を目的として活動されている三重さきもり塾を訪問させていただいた。発災から仮設入居、そして復興までの流れを東日本大震災を例にして確認した上で、仮設住宅の間取り図を用いて、各家庭の状況に見合った仮設住宅での暮らしを考えるとともに、そこからみえてくる課題について検討する場を設けた。併せて、三重さきもり塾で学んだ防災公園や仮設市街地に関する計画等について紹介することで、生徒自身が地域の防災・減災活動の担い手としての意識を高められるよう努めた。

［生徒の声：仮設住宅の間取り図を用いた活動より］

・母に聞いてみたところ、洗濯は毎日のことであるし、ゴミも分別しないといけないということだったので、家の外にその場所を確保したい。
・場所を有効に使うために、（上下の）空間をうまく使うべきである。イスではなく、座布団等片付け可能なものにする。
・下駄箱の真横に台所がある。衛生的に清潔にしなければいけない。
・ベッドを置くことは難しく、布団を用いることになりそうだが、腰などが悪い人には、難しいのではないか。
・２人家族であれば不便なことがあっても、我慢できる。しかし子どもがいると、避難生活であってもやはりおもちゃや父母と遊びたい。そのため、より狭い空間に場所をとってしまう。
・自由な空間はほとんどない。プライベートが保障されない。
・家族間でも譲り合って暮らさなくてはならない。

《第４時》　災害時を想定して　できることを考えよう

①　ねらい

・災害時を想定して、仮設住宅で生活する際に必要な事柄についてリスクマネジメントの視点で考えることができる。

②　授業の概要

「実際に仮設住宅で暮らしておられる人々の想いとはどのようなものなのだろうか。」そこに注目し、筆者による岩手県沿岸南部の視察報告並びに、岩手県で被災者の支援に取り組んでおられる府金良夫先生（雫石小学校校長）をお招きして、講演会を行った。講演会については、全校生徒を対象にした、「危機管理としての命を守る訓練ではなく、『地域とのつながり』や『未来とのつながり』等を意識した、生き方を考える震災学習」として位置づけた。全校での講演会のあと、第３学年を対象に、仮設住宅での暮らしに特化した話を聴かせていただく場を設けた。

「一般論としての仮設住宅での暮らし」ではなく、「実際にそこで生活されている人々の仮設住宅での暮らし」が明らかになったことを受けて、新たな気付きや発見が多々見られた。

その一例としては、

・同じ仮設住宅でも建てれらた時期によって、質が異なる。
・限られたスペースで如何に工夫して生活するか・・・日頃の知恵が生かされる。
・住民の心身の健康を願い、集会所で開かれる勉強会や趣味の会が行われている。
・復旧復興に向けた取り組みは､いずれもその段階で検討した上での最良のてだてである。状況によって、住民の要望は変化し続けるものである。
・働き口のある人々から仮設住宅を出て、都市部に移っていく傾向にある。取り残されてしまうのは高齢者である。仮設住宅での暮らしが長期化する高齢者にとっては、畑仕事が健康づくりの一助を担っていたが、そのような活動もままならない状況にある。

全体講演会の場で、日頃からの心がけとして、「津波てんでんこ」という言葉に象徴される「自分の命は自分で守る」ことの大切さや釜石東中学校の生徒らが果たした「率先して避難する存在になること」の大切さ、しっかりと体力・学力をつけておくことの大切さについての話を聴いたことにより、当たり前のことをきちんとやりきることの大切さを語る生徒が多かった。

それに加えて、高齢者や子どもなどへのさらなる配慮の必要性を訴えていくこと、周囲の人々に現地の状況を発信し、より多くの人々が被災地に対する理解を深められるよう努めること、次の世代に語り継いでいくことの大切さ等が挙げられた。

４　考察

生徒による授業の振り返り等から、教科のねらいとして掲げたものについては、概ね達成できたと捉えることができる。非常時における「環境に配慮した生活の工夫」を、日々の生活で行動するレベルにまで繋げていける力の育成が今後の課題である。

また、ESD 教育の概念を明確にした上での実践であったことについては、「東日本大震

災を経験された方々から学ぶ」こと自体が、「環境における物資やエネルギーの有限性を認識すること」、「人と人とのつながりを認識すること」、「復興に向けて、一人ひとりのライフスタイルを見直すこと」であり、現地の方の生の声を届けたこと、また、他者と考えを共有したことで、多面的に且つ深く考えることができたと捉えている。

ただ、この捉えはあくまでも生徒の授業後の感想等から筆者が定性的に捉えたものである。

家庭科の各領域における学びを、ESD 教育の視点に基づいて捉えること、また、多様な尺度によって、生徒の学びの変容を把握できるよう努めることが今後の課題である。引き続き取り組んでいきたい。

〈参考文献〉

・岩佐　明彦,『仮設のトリセツ』,主婦の友社,2013.3
・大嶋　泰治,『人類は今やその行動力で自滅に向かっている』,晃洋書房,2013.7
・国際家族心理学会,『第 7 回大会　多発する危機と家族の絆　プログラム・発表論文集』,2013.8
・国立教育政策研究所,『学校における持続可能な発展のための教育（ＥＳＤ）に関する研究　最終報告書』,国立教育政策研究所,平成 24 年 3 月
・大和ハウス工業株式会社,『The　Way　of　the　Heart　2011.3.11　東日本大震災の記録』, 2012
・田中　重好・船橋　晴敏・正村　俊之,『東日本大震災と社会学』,ミネルヴァ書房,2013.3
・日本家族心理学会編集,『災害支援と家族再生』,金子書房,2012.6
・日本家庭科教育学会,『第 56 回大会　研究発表要旨集』,2013.6
・日本家庭科教育学会北陸地区家庭科カリキュラム研究会,『生活主体を育む家庭科カリキュラムの理論と実践』,北陸地区家庭科カリキュラム研究会,2003.6
・三重大学教育学部附属中学校,『研究紀要第 25 集』,2010.11
・三重大学教育学部附属中学校,『研究紀要第 26 集』,2012.11
・望月　一枝・倉持　清美・妹尾　理子・阿部　睦子・金子　京子編著,『生きる力をつける学習　未来をひらく家庭科』,教育実務センター,2013.4
・文部科学省,『中学校　学習指導要領』,文部科学省,平成 20 年 3 月